

ひがしとにし

風が吹いてくる東と西——時雨や疾風や塵も

「菜の花や月は東に日は西に」。江戸中期の俳人、与謝蕪村の代表句です。見わたすかぎり黄色い菜の花。夕月が白く東の空に昇り、太陽は西の空に沈もうとしています。

そんな句の中の「東」と「西」という方向を表す言葉に、同じ「し」がありますね。この「し」は「風」を意味する言葉です。

「ひがし」は日が向かう「日向かし」の意味で、東風のことです。その東風から、方向の「ひがし」のことになりました。「にし」は西風で、「に」は「日向かし」に対応する「去ぬ」などの言葉であったようです。「西方は日の没するところであるから、インド・ヨーロッパ語系統のものにも『西に沈む』『消える』という意味を含むものが多く、go westといえは死を意味する。中国では西方の山である崑崙が、死霊の帰するところであった」と

白川静さんは『字訓』の「にし」（西）の項に記しています。相撲でも東の横綱が格上ですが、日が向かう方向が「ひがし」で、「にし」が「日の没するところ」だとわかれば納得ですね。

「ひがし」「にし」のように、風を表す「し」は日常の言葉にたくさんあります。「嵐」は「荒々しい風、暴風」のこと。「つむじ」の「つむ」は集まることです。「じ」は「嵐」で、渦巻き集まる強い風、「つむじ風」の意味です。

その「かぜ」の「ぜ」も「つむじ」の「じ」とつながる言葉です。『字訓』で、白川静さんが紹介していますが、作家・幸田露伴が日本語の語源などを考えた『音幻論』の中に、風に関する言葉がたくさん挙げてあります。

露伴によると「かぜ」の「か」は「気」のことで、大気の動きが「かぜ」です。沖縄語で風を「かじ」と言うことも紹介されています。水の飛沫である「しぶき」も風



で水が激して起こることです。「しぐれ」（時雨）の「し」も風で、「風狂ひ（い）」が転じて、風にもない突然に降ることを言ったのではないかとの説を述べています。

「東風吹かばにほひおこせよ梅の花主なしとて春を忘るな」。菅原道真が太宰府に左遷された時の和歌に、この有名な一首があります。春になり、東の風が吹いたなら、その風に乘って九州の太宰府まで花の香りを届けてほしい。梅の木よ、主人が居ないからといって、春を忘れないでほしいという意味の歌です。この「東風」の「ち」も「風」のことです。『音幻論』には「コチは小風」で「東風」のことだとあります。「風」を表す「ち」に関連した日本語をいくつか紹介しておきましょう。

例えば「はやち」の「ち」も風のことです。急に激しく吹き起こる風、早風のことです。漢字では「疾風」と書きます。東北新幹線の列車の名前にも使われている「はやて」も「はやち」と同じことで「疾風」と書きます。「はやち」の「ち」（ti）を「て」（te）に母音交替した言葉が「はやて」です。

露伴『音幻論』によると、ものが散乱する「ちる」の「ち」も風のこと。「風によつて物の散らさるる」を言うことあります。「ちり」（塵）は風によつて散乱した物のことです。

古代の建築で、屋根に交叉した木材が置かれる「ちぎ」（千木）というものがあります。が、この「ち」も風です。これは風のために屋根が吹き剥がれることを防ぐ木のことです。

また感冒のことを「風邪」と書きますが、漢籍では病氣の名とは言えないようです。日葡辞書（日本語をポルトガル語で解説した十七世紀の辞典）でも「Fria（フウジャ）」は「ヨコシマノカゼ」で、身体に影響して、病気を起こさせたりする「悪い風」とされていることが、『日本語源大辞典』に記されています。それによると、近世で「風邪」は一般に「ふうじゃ」と読まれ、感冒をさすようになったそうです。病氣の「かぜ」に「風邪」をあてることが一般的になったのは、明治以降のことのようです。

さて、冒頭の蕪村の句は京都での句会の作品ですが、蕪村の生地大阪にも、また神戸・六甲にも同句の碑があります。大阪と六甲と言えば、阪神タイガースの歌「六甲おろし」ででしょうか。山などから下に吹く風が「嵐」です。

漢字の「東」「西」や「風」についても紹介しておきましょう。漢字の「東」は「橐」（袋）の形です。「西」は荒目の籠の形で、鳥の巢のようです。この「東」も「西」も文字の音だけを借りて、方角の意味に使った仮借の用法です。「風」は漢字の原形である甲骨文字では大きな鳥の形です。「四方の神」がいて、「風」はその四方の神に仕える使者と考えられ、鳥の形をしていると思われていたようです。後に、その風神は竜形のものと考えられるようになり、「虫」を加えた「風」の字が作られました。「虫」は昆虫類のことではなく、爬虫類の動物を意味しています。竜は爬虫類の一種とされていたのでしよう。